様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２１７４

研究課題名（和文）ブラジル日系移民および在日日系ブラジル人の民俗学的研究

研究課題名（英文）Folkloristic Studies on Japanese Settlements in Brazil and Japanese Brazilians

研究代表者
佐野　賢治（SANO, KENJI）

神奈川大学・経済学部・教授

研究者番号：９０１３１１２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：日系南米移民の生活世界の形成において本国の文化はどのような役割を果たし、また、新たな環境のもとでどのような変化を遂げたのか。本研究は、このような問いに対し、日本民俗学が東アジアで蓄積してきた知見と調査法をもって答える可能性を探求したものである。具体的な研究活動は、移民資料の現状確認に赴いたブラジル国サンパウロ州での２度の現地調査である。諸機関が収蔵する生活用具の保管状態を検分して登録記録を収集し、また、日系入植地を巡見して初期の入植者家屋や工場、宗教施設を見学しつつ古老の記憶の聞き書きをすすめた。その結果、本格的な調査研究を展開する適地としてレジストロ植民地が見出され、次期事業が策定された。

研究成果の概要（英文）：What was the role played by the culture of the mother country when Japanese migrants were building up their living environment in South America, and how that culture was changed through this process of settlement? This study has explored a possibility to answer these questions by applying the research method of Japanese Folklore Studies that was long tested and proven effective in its study of rural societies in Japan and East Asia. Two field surveys in Sao Paulo, Brasil, were conducted to estimate the degree of availability of research materials. Various farming tools brought by Japanese setteres, with their storehouse records, were photographed. Early settlers' houses, factories, and churches and temples were visited while collecting narratives from community elders particularly on their memory of the development of Japanese colonies. As a result, the City of Registro, southern Sao Paulo, has been singled out as the most promising site for a succeeding, full-scale research project.

研究分野：民俗学・文化人類学

キーワード：民俗学　日系人　移民　ブラジル

１．研究開始当初の背景

本研究の組織的母体となった神奈川大学日本常民文化研究所は、とりわけその民具と漁業史資料の収集と整理が学術界で高い評価を受け、継続的に民俗学的な調査研究を積み重ねている。研究の対象としてきた地域は主に日本とこれに隣接した東アジアとであったが、本研究の開始当初には、これを南米日系人社会へと延長する試みが開始されていた。

平成２２年度に神奈川大学とサンパウロ大学との間に学術交流協定が締結され、日本常民文化研究所でも積極的に学術交流を推進するという方針が確定した。これを実体化するために、翌２３年度の学内の国際交流事業の一つとしてブラジルあるいは南米に関する共同研究の基盤形成事業を推進した。具体的には、同年９月に所員がブラジルに出張し、サンパウロ大学、日伯文化福祉協会、ブラジル日本移民資料館、サンパウロ人文科学研究所を訪問、日系移植民資料の収集状況と保管状態を確認した。その他にサンパウロ市内の県人会組織や宗教施設の視察、所員によるセミナーの開催などを通じて積極的に関連情報の収集を進めたが、とりわけ注目されたのは、国際交流基金サンパウロ日本文化センターで得た、サンパウロ州レジストロに日系移民関連の文化財が多数残存しているという情報であった。一方で、翌平成２４年２月には、サンパウロ大学スタッフを招聘し、神奈川県内の日系人集住地区の視察を共同でおこなった。

これらのパイロット的な調査から本研究が策定されることになった。

２．研究の目的

本研究の目的は、民俗学が日本研究で培ってきた研究視角と調査手法とをブラジル日系移民および在日日系ブラジル人社会へと拡張して適用することにある。

日系移民の移動と生活世界の形成過程との把握に、生活用具や伝統芸能といった文化の具体層における変化からアプローチを試みることとし、日本に出自を持つ人々が、日本とは異なる環境での生活経験を重ねるなかで「日本文化」とどのような関係を取り結ぶことになったのかという大きな問題を設定したうえで、物質文化や民俗慣行について比較分析をすすめるに足る資料がどの程度まで確保できるのかを探った。

３．研究の方法

研究活動の中心は、現地に赴いての参与観察と面談調査であり、南米での集約的な共同調査であった。日系移民に関する既存の民俗資料の不備を鑑み、生活用具は写真による記録につとめ、資料館の収蔵品となっている場合には登録台帳を網羅的に収集することで、将来的に学術研究資源として活用できるよう配慮した。また、民俗学調査の方法として定着している古老からの聞き書きを積極的に活用した。

その他、南米調査と並行して神奈川県内の南米人集住地区を訪問し、研究活動の推進に資する人的ネットワークの掘り起こしに勉め、国立国会図書館憲政資料室に寄贈されている移民資料から社会調査の基礎データとなる資料の収集を進めた。

これらのうちブラジルでの現地調査については、以下がその詳細である。

（１）平成２５年１月に研究代表者および連携研究者がブラジルに出張し、サンパウロ州レジストロ市の民具と建築を中心に物質文化に主眼を置いた調査をおこなった。

①レジストロ日伯文化協会にて海外興業レジストロ植民地の歴史資料の収集および古老からの聞き書きを集めた。

②レジストロ日本移民記念館にて収蔵民具の見学および収蔵品目録台帳データを収集した。

③レジストロ植民地内日系移民家屋および茶工場（2010 年連邦歴史遺産登録）、日本人墓地、本願寺、カトリック教会、戦時の国交断絶により代理的に日系人社会の核となったベースボール協会を見学し、入植耕作地区内では日系移民家屋の残存民具を調査した。

④カザロン・ド・シャー（モジ・ダス・クルーゼス市）にて旧日系移民製茶工場（1986 年連邦歴史遺産登録）の文化財修復作業を見学した。

⑤ブラジル日本移民資料館（サンパウロ市）にて収蔵民具の見学および収蔵品目録台帳データを収集した。

⑥ブラジル日本文化社会福祉協会国士舘スポーツセンター倉庫（サンロッケ市）にて大型収蔵民具の保管状況を確認した。

（２）平成２５年１０月に連携研究者がブラジルに出張し、レジストロを中心とする旧イグアッペ郡日系人入植地の視察をおこなった。この期間中には、先人供養の年中行事があり、当年はイグアッペの日本人開拓百週年にあたるため各種行事が盛大におこなわれていた。

①レジストロ市内では、植民地内を巡見して補足調査をおこなったほか、「イグアッペ、レジストロ、セッテバラス日本開拓移民百周年」記念式典に参列し、古老からの聞き書きをすすめ、日本人墓地の無縁仏供養や国道工事殉職者の合同慰霊祭を見学した。

②イグアッペ市では、レジストロの「隣村」にあたるドイツ人植民地パリケラ・アスーを経由し同地での墓参行事を見学した後、イグアッペ港、イグアッペ市立歴史博物館、桂植民地祈念碑を巡見した。

③セッテバラス市でも墓参を見学したのち、セッテバラス日伯文化スポーツ協会を訪問して古老からの聞き書きをすすめ、旧海外興業医院跡など日系人入植地の遺構を視察した。

４．研究成果

挑戦的萌芽研究という本研究の位置づけを鑑みるならば、その主要な成果は、これに続く本格的な研究を展開すべき対象地域としてサンパウロ州レジストロという具体的な調査地を確定したことである。

ブラジル日系人の大多数はサンパウロ州に居住しているが、州都から内陸部へと続く高原に集まった他の日系入植地からは離れて、大西洋岸の平野部に開かれた一群の日系入植地の中心がレジストロである。入植が始まった大正２年には、リベイラ川河口の港町を中核とするイグアペ郡に属したが、その後、イグアッペ、レジストロ、セッテバラスの３市に別れ、後二者は日系人による開発が現在の発展の基礎となった。

旧イグアッペ郡への入植は、（１）出稼ぎではなく自作農としての定住が当初より計画され、（２）入植事業の母体が実質的には国策企業であり、（３）主要作物がコーヒーではなく米または後に茶であったという３点に特徴がある。

内陸部の大農場地帯への契約農民送り出しが大多数を占めた「移民」事業に比べると、自作農の育成を目指した「殖民」事業は大規模な開墾地の渡航前購入を前提とし、より周到な計画を必要とした。現地政府との折衝にあたったのは名目上は民間企業組合であったが、当時の日本政府首脳の後援を受け、最終的に、戦前の移民事業を統括したことで知られる海外興業株式会社の管理下に入る。このため、調査研究にあたっては、事業計画や年次報告など比較的豊富に残された史資料が利用可能である。当時の国策の在り方を具体的事例に即して解析することができるばかりでなく、入植地の区画割りと入植世帯の組織化、長期的居住のための設備などが、日本人村落を前提としつつも現地の環境にあわせてどのように調整されていったのかという視点からも注目される。

一方で、米という主要作物の選択が、入植者たちが母国で慣れ親しんだ生業との強い連続性を担保する。日本の米作の技術がブラジルという大きく異なる環境に導入された際にどのような変化を被ったのか。農耕具や精製機器にはどのような改良がなされたのか、また、農耕の単位となる世帯の農具一式はどのようなものであったか、納屋に残る現物資料から再構成できる可能性が高い。

より広く農家家屋やその建築技術の変化にも、民俗学視点から興味深い資料の発見が期待できる。初期の入植者家屋は日本人大工の手になるものが多く、と言って和風建築ではない独特の形式をみせている。現地の文化財指定を受けた所以であるが、入植地での生活を反映した間取りは、異なる環境下で日本的家族組織が変化していく様相を伝えるものでもあった。

稲に次いで精力的に栽培された茶はレジストロが国内生産の端緒を切ったものであった。一時期は多くの製茶工場が建てられ、日系植民地内で栽培から商品製造までおこなわれていた。ここでも母国の製茶業との比較や社会組織の変化という視点から民俗学的調査研究における興味深い課題を見出すことができた。

本研究から得られた以上のような知見を土台に、平成２７年度からは、課題となる各分野の専門知識を備えた研究者を拡充した研究組織を整えて、レジストロ植民地に焦点をあてた日本人入植地の歴史民俗学という本格的な共同研究へと本研究を発展させている。

＜参照文献＞

①『ブラジルに於ける日本人発展史』（同刊行委員会、１９４２年）。
②『ブラジルの日本移民』（ブラジル日本人実態調査委員会、１９６４年）。
③『レジストロ植民地の六十年』（同刊行委員会、１９７８年）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

森武麿「ブラジル移民と長野県―レジストロ植民地調査から」『比較民俗研究』２９号、２０９－２１６頁、２０１５年、査読無。
泉水英計「天南現出日本村―ブラジル国サンパウロ州レジストロ植民地の形成過程と松村栄治関係資料『戸籍簿』」『比較民俗研究』２９号、１９４－２０８頁、２０１５年、査読無。
内田青蔵「戦前期のブラジル移民の建築遺構―レジストロ植民地の事例」『比較民俗研究』２８号、２０３－２１３頁、２０１３年、査読無。

〔その他〕

泉水英計「日本常民文化研究所における南米日系人研究への試み」『比較民俗研究』２９号、１９１－１９３頁、２０１５年、査読無。

６．研究組織

(1)研究代表者
佐野賢治（SANO, Kenji）
神奈川大学･経済学部･教授
研究者番号：90131127

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
森武麿（MORI, Takemaro）
神奈川大学･法学部・教授
研究者番号：20095756

小熊誠（OGUMA, Makoto）
神奈川大学･外国語学部・教授
研究者番号：90185562

内田青蔵（UCHIDA, Seizo）
神奈川大学･工学部･教授
研究者番号：30277686

安室知（YASUMURO, Satoru）
神奈川大学･経済学部・教授
研究者番号：60220159

泉水英計（SENSUI, Hidekazu）
神奈川大学･経営学部･教授
研究者番号：20409973

(4)研究協力者
森幸一（MORI, Koichi）
サンパウロ大学･文学部･教授